

第九回「いのちの授業」大賞 受賞一覧

【大賞（知事賞）】

筆者

作品名
向井 裕祐

いのちについてかんがえたこと

川崎市立金程小学校 一年

授業実践者

向井 裕美

保護者

【教育委員会賞】

筆者

作品名
上口 絆愛

わたしがうまれた日

横須賀市立追浜小学校 三年

授業実践者

上口 優花

保護者

【神奈川新聞社賞】

筆者

作品名
山田 侑眞

みんなのいのち

箱根町立箱根の森小学校 四年

授業実践者

四宮 健太

箱根町立箱根の森小学校 教諭

【tvk賞】

筆者

作品名
土田 瞳

大切に思われて

茅ヶ崎市立北陽中学校 一年

授業実践者

原田 和子

茅ヶ崎市立北陽中学校 校長

【神奈川県PTA協議会会長賞】

筆者

作品名
寺瀬 愛

つながる思い つながる命

川崎市立向丘小学校 六年

授業実践者

寺瀬 秀夫

保護者

5

4

3

2

1

【ともに生きる社会かながわ憲章賞】 作品名 「大切な家族」

筆者 市川 心結
授業実践者 市川 真菜美
逗子市立逗子小学校 五年
保護者

【優秀賞】 作品名 「生きるということ」

筆者 黒寄 美玖
授業実践者 山本 良子
神奈川県立港北高等学校 二年
神奈川県立港北高等学校 教諭

【優秀賞】 作品名 誰もが特別な存在

筆者 跡田 幾也
授業実践者 上村 圭
授業実践者 渡辺 一史
神奈川県立津久井高等学校 三年
神奈川県立津久井高等学校 教諭
外部講師

【優秀賞】 作品名 「インクルーシブ防災」

筆者 山崎 康平
授業実践者 服部 誠
逗子市立逗子小学校 六年
NPO 法人すこやかいきいき協議会代表理事

【優秀賞】 作品名 「命をつなぐ」

筆者 栗田 藍海華
授業実践者 栗田 智美
平塚市立吉沢小学校 五年
保護者

大賞

いのちについてかんがえたこと

川崎市立金程小学校

一年 向井 裕祐

ぼくは、「ふう」というねこについてかきます。

ふうは、おおきくて、かおがまるくて、はいいろのねこです。

みんながふうをみるとかわいいというくらいかわいいねこでした。

いつもソファアにおいて、かぞくがいるところにおいてくれました。

ぼくが「ふう」とよぶと、いつもすぐきてくれました。むしをつ

かまえるのがとくいでした。

ふうは、しんぞうのびょうきでびょういんにいきました。まだ

3さいでした。ふうは、じつとして、ごはんもたべず、げんきが

ありませんでした。ぼくは、ふうとぼくのえがかいてあるおまも

りをつくりました。

ねこは、うっとりすると、めを「ぎゅうー」とつむります。

それは、「すきだよ」のしるしです。ぼくもかおをちかづけてめ

を「ぎゅうー」とつむり、「すきだよ」とつたえます。これを

びょういんでもやりました。

ふうは、しんでしまいました。とてもかなしくて、いまでもお

もいだすとないてしまいます。

どうしてこんなかなしいのか、ぼくはおかあさんとかんがえました。まだいっしょにいたかったからだとわかりました。

でも、いのちはずっといっしょにいられないということをつうにおしえてもらいました。

でも、ふうはいろんなところにいます。ふうのほねは、おはかにいれずにいえにもつてかえりました。ぼくたちがせいちようするのをみられるようにです。ふうのことをおもいだすと、てがみをかいてそこにもつていきます。ふうは、ぼくのこころのなか、おもいでの中にもいます。こころのなかやおもいでの中かでは、ずーっといっしょです。

教育委員会賞

わたしが生まれた日

横須賀市立追浜小学校

三年 上口 絆愛

わたしがママのおなかにきた時、ママはお仕事をしています、毎日つわりというもので気もちが悪いのに電車で行っていたそう。仕事で終わると次は食よくができてラーメンや、やき肉、アイスにケーキなんでもいっぱい食べたんだって。大きくなっていくおなかで身動きとれなかったり、夜ねれなかったりしたんだけど、はなが元気に育ってくれてるのがうれしくておなかをなでて「今日もお仕事につきあってくれてありがとう。」って話しかけていたんだって。わたしが生まれた日、インフルエンザがはやっていて、ぱぼもびょういんに入れなくて、ママは一人ふあんの中、いたみにたえながらわたしをうんでくれました。3602グラムの大きな赤ちゃんだったみたいです。

わたしは生まれた時に、足の小ゆびとくすりゆびがかわ一まいでつながっていたそうです。たごうししようっていうんですって。実はママもわたしとおなじように足のゆびがつながって生まれたみたいで、ママは「自分のせいだ。」とびょういんのへやでない

たみたいです。二才まで二回しゅじゅつをしてなんとかゆびはなされたのですが、つめがへんな風にはえてくるので気になっていますが、もうしゅじゅつはしたくないです。ママとおそろいなのでいいです。ちなみにわたしの名前の絆愛の意味は、京との言葉のはんなりからきていておちついたはなやかさがあり、明るくようきでたくさんの人からあいされる人に、そして、人との絆をたいせつにできる人になってほしいというねがいがかめられています。わたしは自分の名前が大すきです。そのあと弟が二人うまれました。ママが気もち悪くなって何もできないすがたをみました。それでもごはんを作ったりせんたくしたりしてました。だからわたしもたくさんお手つだいしました。ママのおなかのなかでキックする弟をママといっしょに話かけながらなりました。わたしもこんなふうにたいせつに育てられて元気にうまれてきたんだなっておもいました。わたしはママとぱぼの子どもでもしあわせです。あと、うるさい弟とニコニコの弟のネエネになれたこと、たいへんで毎日じゃまばかりされるけど楽しくてうれしいです。ママがたくさんいたいおもいしてうんでくれたので、毎日元気に楽しくすごしたいです。

神奈川新聞社賞

みんなのいのち

箱根町立箱根の森小学校

四年 山田 侑真

ぼくはこの命のじゅぎょうをうけて命は自分の「時間」だと思いました。なぜなら時間がたつと生きていける時間も少なくなるからです。こういう事を考えていると、ぼくはいつか死んでしまうのかと心配になってしまいました。けれどそれと同時に、ぼくを生んでくれたお母さん、さらにお母さんを生んでくれたおばあちゃん。ぼくの先祖からのちがつながっているんだと思いました。そう考えると今のぼくがいることがきせきだと思いました。ぼくがいることに「ありがとう」と感しゃをしたいと思います。だから、ぼくは、時間がなくなることをごわいと思わずに、その時間を自分の時間だけでなくてだれかのためにも命を使いたいと思いました。そうしてみんながよろこんでくれてぼくに「ありがとう」と言ってくれたらぼくもみんなに「ありがとう」と言いたくなるので、これからぼくのいのちはみんなのいのちにしていきたいと思いました。

大切に思われて

茅ヶ崎市立北陽中学校

一年 土田 瞳

「ただ生きているだけ。」「生きるのがつらい。」というような言葉を、ネットニュースで度々目にする。

何がそんなに「つらい」のかと思って、その内容を読んでみると、とても繊細な心を持った人たちが、生活に疲れている。年代は、様々だが、ときには、私と同じような小中学生もいる。どんな子が、こんなに悩むのかと思って、さらに記事を読むと、「幼少期に、自分を大切にしてもらえなかった子ども」が、自分に生きる価値がないと考えてしまうことがあるらしい。なるほど、つらい幼少期を過ごしたのだろうかと思って、同情をしたりしていた。

そんな時に、私の中学校で、道德の授業があった。その中で、先生は、自分の誕生日がわかるのは、当たり前ではないこと、そして、自分の名前の由来を知っていることも、当たり前ではないことを話してくれた。

そこで、思い出したのは『世界がもし百人の村だったら』のことだ。その中で、百人中十五人は太りすぎて、二十人は栄養失調

で、一人は死にそうだというのがあった。

栄養失調だったり、死にそうな人は、紛争や貧困によって、自分を守ってくれる大人がいなくても多だろう。その子たちは、自分の誕生日がわからないかもしれないし、名前の由来を教えてください人もいないかもしれない。それから、家のどこかに、小銭が転がっている人は、百人の中で、最も豊かな一人のうちの一人だということもあった。それは、私たち日本人は、すごく豊かな生活をしているということだ。

それなのに、「生きるのがつらい。」という日本人が多くいるのは、なぜだろうと考えると、同じ道德の授業の中で私が感じた、「誰かに、自分の話を真剣に聞いてもらう」ということは、自分をわかってもらった感じがして、嬉しい気持ちになるということ」にヒントがあると思った。それは自分を大切にしていることと似ている。人間は、誰かに認めてもらって、大切に思ってもらえることで、人として豊かに生きていけるものなのだろう。

私は、今、全然つらいと思わない。その理由は、自分の誕生日も、名前の由来もしっかりわかるし、小銭も家に転がっている豊かな日本に生まれたからだ。さらに、私の話を、真剣に聞いてくれる大人や、友だちもいる。

私は、大切に思われて、何て恵まれた環境に生きているのだろうと改めて実感した。

私が私に生まれて、本当に幸せだったと感じた道德の授業だった。

神奈川県PTA協議会会長賞

つながる思い つながる命

川崎市立向丘小学校

六年 寺瀬 愛

球場にセミの声が鳴り響く。私の打席が回ってきた。大事な、大事なこの打席。

「バコン。」

その瞬間、私は「やばいー!」と思い、必死に一塁目掛けて突っ走った。顔を上げると、審判が右手を上にあげ、アウトを告げている。ボロリボロリと涙があふれてきた。しばらく応援に来られなくなる父に、いいところを見せたかったのに!。

七月のある日、いつも通り野球の練習を終え帰宅すると、母が大事な話があると、私と弟に話し始めた。

「パパ、今日病院に検査にいったでしょ。そしたら、すぐ入院して治療をしなきゃいけない病気が見つかって、急けど火曜日から入院することになったの。水泳選手の池江璃花子さん知ってるでしょ。池江さんと同じ白血病という病気だね、池江さんが元気になったようにパパも元気になってまた必ずお家に戻ってくるから、しっかりパパが頑張れるように応援しよう。」ソファに座る父の顔を見ることはできなかったが、父が一番辛くないはずだと思い、ぐっと涙をこらえた。

父の入院が始まった。治療が進んでいくと、強い薬の影響で、髪の毛が抜けたり、皮ふが赤くなったり、食べられずにやせたりした。会って父を励ましたかったが、新型コロナウイルスの流行で面会できない日が続いた。父の体調がよい時にテレビ電話をしたり、弟と楽しい動画を撮って送ったり、「病気が治るキーホルダー」を作ってプレゼントしたり、父が少しでも元気になりそうなことを自分なりに考えた。

父の入院中、母は仕事と家事と私たちの世話を一人でこなし、父の病院に荷物も届けていたので、心も体も忙しいだろうなと思った。母も辛いし怖いかもしれない。私もできることをして、母を支えたいと思い、母が仕事から帰ってくるまでの間に洗濯物をたたんだり部屋の片付けをしたりした。

そんな私たち家族を、本当にたくさんの方が支えてくれた。近くに住む父方の祖父母は母が少しでも楽なようにと毎日おかずを届けてくれた。最初は昔ながらの和食だったのに、私たちの口に合うようにと祖母が料理番組を見て勉強し、おしゃれなイタリアンも届くようになった。温かい気持ちがあった。青森に住む母方の祖父母からは、よく荷物が届いた。味覚がなくなってきた父でも美味しく食べられるりんごや、留守番中の私たちが楽しめる本など、いつも祖父母の優しさまでつめこまれていた。父の職場の方からは千羽鶴や応援歌が届き、病室でも励まされたそう。野球の監督やコーチは、父に代わって野球道具を修理してくれたり、野球のことをたくさん教えてくれたりした。お隣さ

んはいつも年末の大掃除で父がしていた外階段の掃除を、

「ついでですから。」

と我が家の分までやってくれた。他にも学校の先生、父や母の知り合い、友達のお母さんなど、たくさんの人に声をかけてもらった。みんなの「父が元気になるように。」という気持ちで、私たち家族にたくさん勇気とパワーをくれた。

父は、冬に「さい帯血移植」をした。正常な血液を父の体で作る、父の命をつないでいくために必要な治療だそうだ。「さい帯血」とは、赤ちゃんとお母さんを結ぶへその緒の血液で、造血幹細胞という血液を作るためのもとがたくさん入っている。父の体に合うドナーさんを病院の先生が探してくれて、日本のどこかに住む赤ちゃんとお母さんのさい帯血の提供を受けた。どんな気持ちでこのお母さんは提供してくれたのだろう。きっと「誰かを助けられたらいいな。」という温かい気持ちだったのではないかと思う。大好きな父の命をつないでくれて、心から「ありがとうございます」と伝えたい。

たくさん人の思いやりと優しさが、父の命を支えた。知っている人だけでなく、会ったことのない人も。人々の温かい心がつながっていくことで、命が輝きそしてつながっていく。父とまた一緒にキャッチボールが出来ること、一緒にご飯を食べられること、命があるからこそその、何気ない日常に幸せを感じている。私も大人になったら、けん血をしたり、骨髄バンクに登録したりして自分だけではない命も大切にしたい。

さわやかな新緑の球場。センター後方には久しぶりに父の姿がある。

「バコーン！」

父がいるセンター方向へ、まさかのホームラン。父が入院して治療を頑張っている間、私も一緒に頑張りたくて、いっぱい野球の練習をした。笑顔の父の姿が見えて、今度はうれしい方の涙がこぼれた。

ともに生きる社会かながわ憲章賞

「大切な家族」

逗子市立逗子小学校

五年 市川 心結

私の家に「ベル」という18才のねこがいます。ベルは私やお兄ちゃんが生まれる前からいました。若い頃は、一緒におもちやで遊んだりしていたけど最近は寝てばかりです。

だけど、ごはんがほしい時や起こされてしまった時はすごく大きな声で「マウーマウ」と鳴きます。ベルの好きな場所は、ソファーのはじっことお兄ちゃんのふとんにもぐって寝るのが好きだそうです。私はベルのもふもふしている所が好きです。

ある日、寝ようと自分の部屋へ行こうとした時、突然お兄ちゃんが「ベルの目がおかしい！早く来て！」と言ったので見に行ってみるとベルの目が白目をむいて目があかない状態でした。私も「おかしい！」と思ったのでお母さんに言いました。その日は土曜日の22時ごろだったので、病院が、なかなか見つかりませんでした。

でもお父さんが必死でいろんな病院に電話をしてやっと診てくれる病院を見つけて4人でベルをつれて行きました。獣医さんに点滴を打ってもらい検査をすると血も臓器もなにも異常なしだ

だったので脳の病気かもしれないと言っていました。それを聞いて私はショックでした。でも脳の手術をすることは出来るけどベルは、18才と高齢でこの手術にはたえられないと思うのでおすすめはしませんと言われました。

次の日、薬をもらいベルをつれて家に帰り、家族で話し合いました。みんなで出した答えはベルは病院が大きらいだし、手術のせいで死んでしまったらいやなのでベルが一番落ち着く家で家族みんなで精一杯お世話をしようということになりました。

その日からベルの体をふいたり、お水を飲ませたり、ベルのベットのペットシートを汚れたら交換したり、動かなくなってきた手足をマッサージしたりしました。

ベルは呼吸が苦しそうで手足も左前足以外はどんどん動かなくなってきたのに何度か立ち上がって歩こうとしました。

でもフラフラして、すぐに転んでしまいます。私がベルの体を支えてあげると何歩か歩くことが出来ました。

夜は私とお兄ちゃんはベルのいる部屋で寝て、お父さんとお母さんが交代しながらベルの看病をしてくれました。お父さんとお母さんに私が寝ている時のベルの様子を聞くと、夜も苦しそうで眠れなかったそうです。

そのまま朝になり、私は6時に起こされ、家族みんなでベルのことについて話し合いました。獣医さんによると、ベルの夜中の状態からみて、長くはないとお父さんは聞いたようです。いつベルが死んでしまうかわからないので、ベルにありがとうと大好き

だよとたくさん伝えました。最後はすごく苦しそうだったけれど、ベルは最後まであきらめず生きようとしているように見えました。すごく悲しくて、たくさん泣いたけど、ベルから命の大切さ、あきらめないことの大切さを教えてもらいました。

これからはベルに教えてもらった事を活かして頑張っていこうと思います。

私は一生、ベルのことを忘れません。

優秀賞

「生きるということ」

神奈川県立港北高等学校

二年 黒寄 美玖

「生きるってなんだろう」というのが土の歌を聞き終わって最初に浮かんだ気持ちだ。シンプルに言えば、心臓が動いている状態のことを指すかもしれないが私の思う「生きる」とは人と人が出会うことだ。それを強く感じる出来事が最近私に起こった。引越しと転校だ。父の仕事の影響で12月に神奈川へ引越した。私は「私が産まれた時点では出会う予定の無かった人たち」と出会うことができた。もちろん前にいた高校での友達と離れることは辛く寂しかったが転校を後悔している訳ではない。自分が知らなかったことを知り、やりたいけどできなかったことを実現できた。思考の選択肢が広がったとも感じる。出会えて良かった人が大勢いて私は幸せだ。

世界中に生きている人間は数多くいて、その中で私の両親が出会って私が生まれた。両親が少しでもすれ違っていれば私は生まれなかったかもしれない。素晴らしいことで奇跡だ。そして周りにも奇跡によって、この世に生まれた存在なのだと思うことができた。「人との出会いは奇跡との出会いだ」と思った。

第六楽章・地上の祈りの後半部分にある、「地の上に花咲く限りよるこんで日ごと営み 悲しみも耐えて生きよう」という歌詞が私の中でお気に入りだ。中学から高校へ、転校で別の高校へと私の居場所は時々変わる。

どんなに過去へ戻りたいと願ってもそれはできないから、今いる場所で精一杯自分の花を咲かせたいとこの歌詞から考えた。悲しいことがあっても努力の末に咲いた花を見れば耐えられるかもしれないと思った。その「花」は、自信だったりかけがえのない友達だったりする。そして花が咲くのは、大地のおかげだ。大地があるから私たちは満開に花を咲かせることができる。この星に生まれた奇跡がここで言う大地に当たると思う。大地讃頌。今生きていくことに感謝しなければならぬ。当たり前を改めて気付かせてくれたこの歌と私との出会いもまた素晴らしい。

優秀賞

誰もが特別な存在

神奈川県立津久井高等学校

三年 跡田 幾也

「障害者の人権」という言葉を聞き、不思議な言葉だなと感じました。人権とは人間の権利であり、それを「障害者の」と分類する言葉がなぜ存在しているのか不思議でした。人権は、人として自分らしく生きるという意味があります。それを当てはめると、障害者が人として自分らしく生きるとなり、良い言葉にも聞こえます。障害者の人たちのことを考えようという明るい言葉なのかもしれません。しかし、「障害者の」という言葉が付くということとは、私たちが無意識のうちに特別な存在として感じているのではないのでしょうか。今回、障害者の人の生活について話を聞きました。初めて知ることも多くありました。知らないからこそ、自分とは違い特別だと感じるのかもしれない。勉強すること、経験することなどを通して、社会のさまざまなことを知ることができれば、障害者が特別という意識も低くなるのではないかと思えます。

最近、バリアフリーやユニバーサルデザイン、共生社会という言葉をよく聞きます。どれも目標は、誰もが暮らしやすい環境

にすることですが、これらの取り組みに向けて注目されるのは、やはり障害者の人たちではないでしょうか。障害のある無しに関わらず、さまざまな立場からこれからの社会について考えていく必要があります。つまり、私も他人事ではありません。今、高校で福祉を勉強し介護のプロを目指しています。これから大人にもなります。私にできることは何か。何か良いことをしなくてはと簡単に考えていました。しかし、真剣に考えてみると、良いことをとは何か悩みました。そして、実際に行動するのは簡単なことではないこともわかりました。1人では難しいことも多いです。たくさんの人に今回のような話を聞いてもらい、同じ気持ちになり、何かできるような社会になるといいなと思います。

優秀賞

「インクルーシブ防災」

逗子市立逗子小学校

六年 山崎 康平

「インクルーシブ防災に参加してみない？」とある日母から提案されました。僕は「防災」は知っていますが「インクルーシブ防災」って何だろう？と思いました。そして僕は「インクルーシブ」と言う言葉にひかれて参加してみることにしました。「インクルーシブ防災」とは、災害時に障害者や高齢者を含め誰も取り残さず、あらゆる人を受け入れる、ということだそうです。

地域で行われた「インクルーシブ防災」は「避難編」と「避難所編」の二回に分けて開催されました。まずそこで僕は衝撃を受けました。僕は災害が起こったらまずは逃げる、と言うことを想像します。そればかりが頭にあって、避難所で数日過ごす、と言うことがすっかり抜け落ちていました。大きな災害になると「避難編」「避難所編」だけでなく、「復興編」も視野に入れて行動しなければならぬそうです。

日本は災害大国と言われています。僕が生まれた後に起こった災害だけを考えても、東日本大震災や度重なる台風被害や豪雨被

害などがあります。その中で障害者や高齢者の方の死亡率は一般的な死亡率の二倍になっているそうです。また災害関連死における割合は二十四%にもなるそうです。僕はとてもショックを受けました。同じく大切な命なのになぜそのように差が出るのかと。どんな人にも愛する家族や友人、知人がいます。もしも助かる命を知識やサポートがないために助けられなかったら、どんなに無念だろうと思います。このような事態を防ぐためには障害者や高齢者、乳幼児や健常者など、世の中には多様な人が存在し、その人それぞれに適切な防災の方法があることをみんなで考えて行かなければならないと思います。

自治体には「福祉避難所」と言うバリアフリー機能を持った避難所があるそうです。災害時に近くにあればとても有効的だと思います。ですが非常時に避難する場合、果たしてそこまでどり着けるのか？近くの避難所の方が早く安全にたどり着けるのではないのか？地域の人ならば誰でも地域の避難所で受け入れることが出来れば、被害を最小限に抑えることが出来ます。避難行動で配慮が必要な人を地域の避難所でのように受け入れるのか、そして配慮が必要な人は地域のどこにいるのか、彼らは災害時にどのように避難し、どうやって情報共有して行くのかをみんなで作って、地域の防災訓練で実践していくことが大切だと思います。

この「インクルーシブ防災」に参加して僕の心に一番響いたことは、僕の大好きな全盲のおっちゃんや車イスユーザーのお姉さ

ん、若年性認知症のギタリストのおじさんが言った言葉です。全盲のおっちゃん「僕は目が見えないけれど、車イスに乗っている人が目になってくれれば、車イスを押して避難所に行くことは出来るよ」、車イスユーザーのお姉さんは「避難所で受付係くらいだったら私は出来ます」、若年性認知症のギタリストのおじさんは「避難所で個室があっても、自分よりもっと配慮が必要とされている人に使ってもらいたいです」と。この感動をどのように伝えたら良いのかわかりません。ただ一言言えるのは「命は平等であり、とても大切なもの」であるということです。

緊急時に誰一人取り残すことなく行動するためには、個人や地域社会の防災意識が大切である、と言うことを今回の「インクルーシブ防災」で学びました。

優秀賞

「命をつなぐ」

平塚市立吉沢小学校

五年 栗田 藍海華

朝晩はまだ肌寒い、ある春の日のことでした。

自宅裏の物置に行った時に、かすかに「ミャー、ミャー」という声が聞こえてきました。最初は聞きまちがいかと思ったくらいとても小さな声でした。物置の下はまっ暗で何も見えなかったので、懐中電灯を持ってきて照らしてみると、何かが動いているのがわかりました。腕を入れても届かないので、竹ぼうきのえの方をそつと差し込んで、ゆっくりたぐりよせてみると、何とまだ目も開いていない猫の赤ちゃんが三匹出てきました。悲しいことに黒と白のも様の子は、すでに冷たくなっていました。お母さん猫が近くにいないか探しましたが、いませんでした。

我が家では犬を飼っていますが、猫、しかも赤ちゃんのことは全くわからずあせりました。とにかくまずは体を温めようと思い、近くのスーパーに走って段ボールをもらってきて、タオルをしきつめ、その中に茶トラの二匹を入れました。私の片手で持てるぐらいの小さな命です。

かかりつけの獣医さんに連れて行き、診てもらおうと、おそらく

生後一、二日で、二匹ともオスであること、初乳といってお母さん猫の最初の母乳を飲んでいない場合、命が助からない可能性がとても高いことを教えられました。

猫の赤ちゃん用のミルクを買い、獣医さんに教えてもらった方法でおしっこを出すお手伝いとミルクをあげました。三時間に一回のお世話はとても大変で、家族みんなで協力して行いました。ミルクのあげ方がよくないと、ミルクが肺に入ってしまうこともあるそうで、緊張しましたが、二匹は「ミャー、ミャー」と元気よく鳴いて、食事とはいせつをすませると、スヤスヤと眠り、本当にとてもかわいかったです。

次に、二匹をこれからどうしていくか考える必要がありました。我が家ではすでに犬を飼っており、今、猫を飼うことはできない状況でした。私はとても飼いたかったのですが、毎日のお世話や猫が安心して過ごせる環境を作るなど、ただ飼うのではなく、猫が幸せに暮らせることを考えなければならぬと学びました。

お母さんが動物愛護センターに電話を試してみました。コロナの影響でじようと会を開くことができているので、処分される可能性が高いといわれたそうです。目の前の二つの命をみると、それはとてもできないと思いました。そこで、インターネットで保護猫の会を探し連絡してみました。電話はつながりましたが、そこではあずかっている猫がいっぱいで、特に生まれたばかりの赤ちゃんはお世話が難しく、ミルクボランティアというプロの手が必要だと知りました。しかし、電話に出て下さった方は、あち

ここに連絡をとって、最終的に二匹がミルクボランティアさんの所へ行けるようにしてくれました。本当に本当にうれしかったです。

二匹をミルクボランティアさんにたくした時、正直、別れるさみしさはありました。しかし、すすく育つようにと「たけ」「のこ」と名付けられた二匹の成長を、その方がSNSにのせてくださっていて、その様子を見ることができました。目が開くと一段とかわいらしかったです。その後、「たけ」「のこ」は二匹一緒に、新しいご家庭に引き取られたそうです。いつも寄りそっていた二匹にとっては幸せなことだと思いました。

私の家族、獣医さん、保護猫の会、ミルクボランティアさん、新しい家族、いろんな人の力がつながって、二匹は幸せな生活にたどりつきました。二匹の猫との出会いは、「命とはつなげるもの」だと私に教えてくれました。